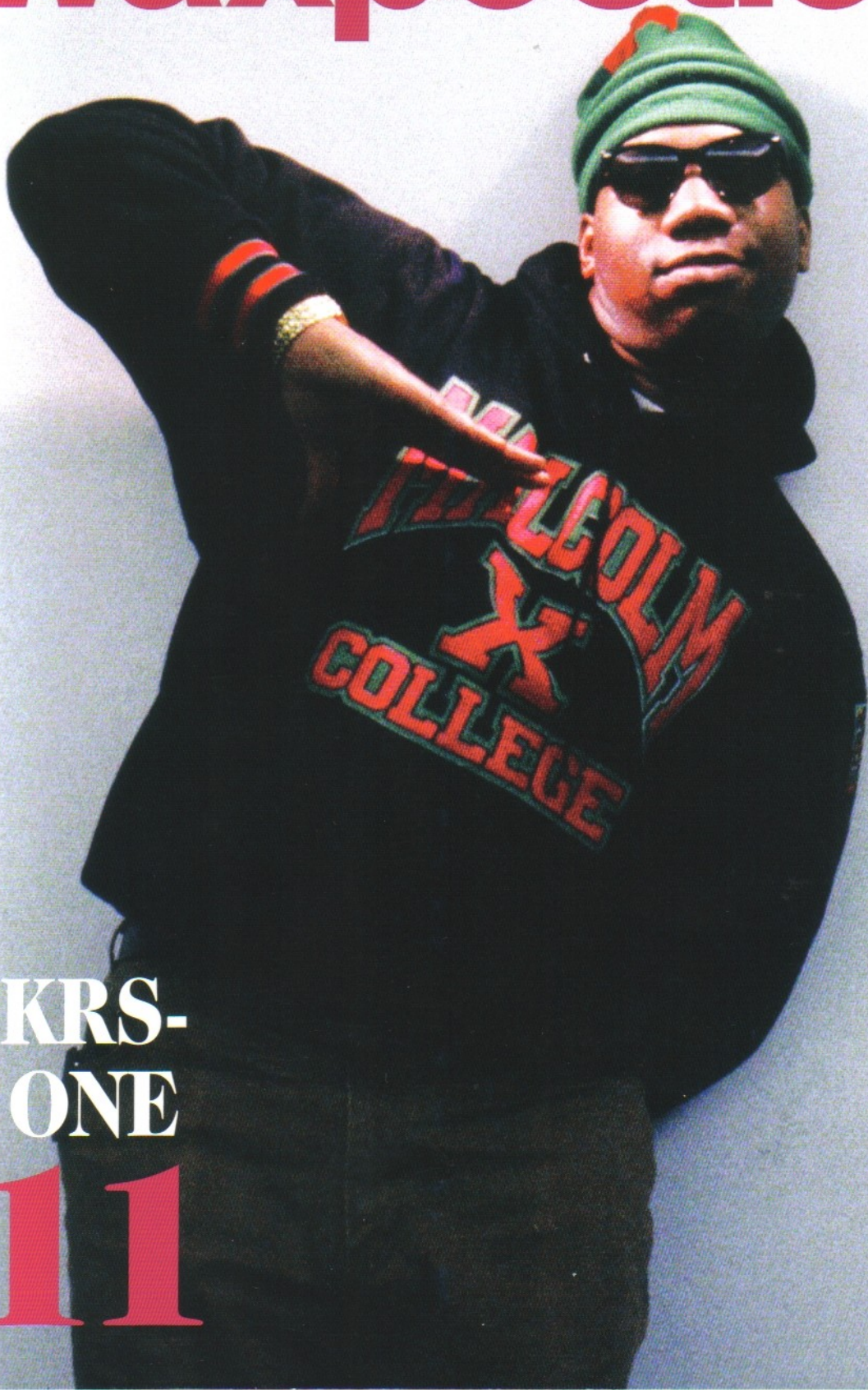


JAPAN  
**waxpoetics**



**KRS-  
ONE**

**11**

# Return From The Cockpit

Tom Browne

コックピットからの帰還〜トム・ブラウンが放つ11年振りの新作

by Mitsuru Ogawa

**English translation of interview on last pages**

ジャズ・トランペッターのトム・ブラウンが1980年に発表した「Funkin' for Jamaica」は、ジャズ/フュージョン界に留まらずビルボード R&B チャートで1位、UK チャートでもトップ10にランクされ、一躍彼をブラック・コンテンポラリー・ミュージック界におけるトップ・スターへと押し上げた。現在もダンス・クラシックとして多くの人を魅了し、サンプリング・ソースとしても継続して影響力を持つナンバーの1つだが、その後トム・ブラウンは80年代後半から音楽業界とは一定の距離を置き、2000年にコンチネンタル航空のキャプテンに就任、2008年までフェデラル・エクスプレス関連会社のマウンテン・エア・カーゴで機長を務めている。ミュージシャンとしては異色のキャリアの持ち主だと言えるが、そんなトム・ブラウンが1999年の「R 'N' Browne」以来、実に11年振りとなる新作「S' Up」(ワッツアップ)を発表した。10年ほどのブランクを経た後、音楽シーンにカムバックした彼にとって、そこには人に言えないような悩みや葛藤があったと察するが、そうした特異な経験を踏まえた上で彼の音楽の原点にあるもの、そしてそれが受け継がれ生まれたこの新作について話を聞いた。

**まずは、2000年にコンチネンタル航空のキャプテンに就任した経緯を教えてください。**

実を言うと、私は1973年にプライベート・パイロット・ライセンスを取得していて、1988年頃からWRAという地方の小さな航空会社で副操縦士の仕事をしてたんだ。1989年にはある航空会社のメイン・パイロットになった。それからコンチネンタルのキャプテンになったけど、もともとパイロットになるのが長年の夢だったし、その頃は音楽の仕事だけで食べていくのが難しかったからね。音楽は私の創造力を駆り立ててくれて、パイロットの仕事は私の正確さを高めてくれる。どっちの仕事も極めるには相当の時間が必要だから、両立するのは大変だった。今でもその難しさは感じているから、最近は音楽だけに集中しようと思っている。

では音楽について伺います。11歳からピアノを弾き、その後トランペットを演奏するようになったそうですが、ピアノとトランペットという楽器には共通する要素があまりなく、それらを並列して演奏するミュージシャンも多くないと思います。

ジャズをやる前はクラシックをやっていたけど、ピアノはあらゆる音楽教育の基礎であって、音楽的基盤を作る上でとてもためになるものなんだ。作曲、ハーモニー、アレンジとか、いろんなスキルを身につけることができる。だから私も最初はピアノをやったけど、もともとはトランペットが好きだった。あの華やかな音がね。それで1958年頃、中学生の時に奨学金を受け取ることができ、アルトゥーロ・トスカニーニが指揮するNBC交響楽団のトランペッター、マレー・カーピロヴスキーから学んだ。それからハイスクール・オブ・ミュージック&アートにも通って、いろんな素晴らしいミュージシャンと出会ったんだ。ノエル・ポインター、マーカス・ミラー、デイヴ・ヴァレンタイン、ジャニス・イアンと挙げればきりがいいね。ジャズを学ぶようになったのは、クラブでミュージシャン達が演奏する姿を観てからだ。私の地元はニューヨークのジャマイカ地区だけど、そのクラブでフレディ・ハバードやリチャード・ウィリアムズがよく演奏していた。

**最初のギグは1975年、クイーンズにあるVillage Doorというクラブで、ウェルドン・アーヴィンのバンドだったそうですね。当時、アーヴィンはクイーンズのミュージシャンの中でとても信頼が厚く、まとめ役のような存在だったそうですが、彼はジャズのみならず多くの音楽にも通じ、クラブ・ミュージック・シーンにおいても不世出のカリスマと尊敬されています。残念ながら2002年に他界しましたが、彼についての思い出を話してもらえますか？**

ウェルドンには特別な力があってね、ダイヤモンドの原石を見つけてそれを光らせることができた。だけど彼の一番凄いところは、マーカス・ミラー、ドン・ブラックマン、レニー・ホワイト、プレッカー・ブラザーズ、



バーナード・ライト達を上手くコントロールしていたところだ。みんな性格も違うしエゴもあったはずなのに、上手くまとめていたよ。あと、彼はアレンジャーとしても唯一無二の存在だった。

1976年にソニー・フォーチュンのアルバム『Infinity』に参加し、またロニー・スミスのバンドでも演奏をするようになりました。当時は他にもフレディ・ハバードやウディ・ショウなど多くの名手と共演していますが、特に印象に残っているギグはありますか？

残念だけど昔の伝説的なジャズ・プレイヤーを除くと“シグネチャー・サウンド”、つまりその人独自のサウンドを持っている人は、今はもういない。ウィントン・マルサリスでさえ持っているとは思えない。昔は演奏が始まると、すぐに誰が演奏しているか分かったんだ。ウディも亡くなってしまって、そうした中でソニーは数少ない生き字引の1人だよ。一番心に残っているギグは、1976年頃、ニューヨークのVillage Vanguardでソニーのバンドでプレイした時かな。誰かがコルネットを演奏していて、私はその音に声を失った。ジョン・コルトレーンの「Sheets of Sound」を思い出すような感じだったけど、今まで聴いたことがない音だった。それがあのウディ・ショウだったのさ。

そうしてキャリアを積み、1979年にデイヴ・グルーシンとラリー・ローゼンが主宰する GRP Records からデビュー・アルバム『Browne Sugar』を発表し、翌80年にはセカンド・アルバム『Love Approach』からカットされた「Funkin' for Jamaica」が大ヒットします。あの曲はどのようにして生まれたのですか？

あの曲ができる前にアルバムはほとんど完成していたけど、グルーシンとローゼンは何かが足りないと感じていた。そんな時、あのベースラインとグルーヴを思いついて形にして、バーナード・ライトに聴かせたら気に入ってくれてね。そこにグルーシンのキーボードを加えたら完成だよ。その頃一緒にやっていたキーボーディストのガールフレンドがトニー・

スミスで、彼女に歌詞とボーカルをお願いした。GRP を配給していた Arista の人間は最初は興味を示さなかったけど、人気が出だしてから態度が変わった。あの曲はジャマイカ地区の男達がジャム・セッションで強烈なグルーヴを放ってる感じだろう。ジャマイカ地区のテーマソングさ。あれこそがジャマイカ地区出身のミュージシャンの“シグネチャー・サウンド”だよ。

その後、『Magic』や『Rockin' Radio』をリリースした後、80年代後半からはパイロットとしての生活も忙しくなり、90年代はアルバムのリリースはあるものの、それほど活発な活動状況とは言えなかったと思います。そして前述のようにコンチネンタル航空のパイロット就任を経て、2008年に本格的にカムバックしました。

最初に GRP と契約した時はただ音楽を作ってほしいと言われたけど、「Funkin' for Jamaica」がヒットしてからは、ヒット曲を作るように言われた。話が違うと思わないかい？ そうなったらもうクリエイティビティなんてものは必要なく、ヒットの法則で曲を作ればいい。これは GRP のせいではなく、その上の Arista の問題だったと思う。だから Arista は1983年頃に GRP から私を引き抜いたんだ。もっとヒット曲を作らせるためにね。結局いろんなプロデューサーをあてがわれて幾つかアルバムを作った後に、私と Arista の関係は終わった。1986年に Arista を辞めて、その後はあまり熱心に次のレーベルを探したりはしなかった。それほど後味が悪い思いをしたんだ。それから Malaco Records でクリスチャンのミュージシャンとしてのアルバムを出した後は、最初に話したように昔からの夢だったパイロットになるため音楽と距離を置くことにした。90年代半ばに知り合いが Hip Bop というレーベルを立ち上げ、私に興味を持ってくれたから、1999年まで Hip Bop で幾つか作品を作ったよ。でも、その間も私の生活費はパイロットの仕事に頼っていた。そして2008年に、個人的な事情と経済的な理由でキャリアの変更を迫られた。そこで音楽に全ての情熱を注ぐことに決めただ。

1981年、左から順に、スタンリー・タレンタイン、ジョージ・ベンソン、エンドウグ・チャンスラー、サミー・フィガロア、エリック・ゲイル、スタンリー・クラーク、トム・ブラウン。 Photo courtesy of Tom Browne.



Photo courtesy of Tom Browne

2009年には中村照夫さんがプロデュースしたマウントフジ・ミュージック・フェスティバルでも来日し、グルーヴ・コレクティブのステージにゲスト参加しています。そして、今作は中村さんのプロデュース、グルーヴ・コレクティブのジェイ・ロドリゲスによる共同プロデュースの作品です。そのグルーヴ・コレクティブのメンバーが多く参加すると共に、ファンク界の大御所フレッド・ウェズリーも参加していますね。

照夫とは昔から知り合いで、きっかけは私が最初にレコード会社と契約した頃にまで遡る。70年代半ばのジャマイカ地区で初めて彼と会ったけど、私達はどちらもジャズ・クラブの常連だった。彼はジャマイカ地区を「ホーム」と呼ぶ数少ないバンド・リーダーの1人さ。グルーヴ・コレクティブとは照夫の紹介で知り合った。ジェイはとても素晴らしいミュージシャンだよ。今のサクソフレイヤーはありきたりで古臭い感じが多いけど、彼は一味違う。フレッドとは今回のレコーディングの時に初めて会った。たまたま同じスタジオに来ていて、今回のアルバムに協力してくれないかと頼んだら、快く引き受けてくれたんだ。

今作は今まであなたがやってきた音楽の枠から外れることなく、ジャズ、フュージョン、ソウル、ファンクなどがストレートな形でミックスされた作品集だと思います。「Lament」のようなメロウなナンバーがあり、「Freeway」のようなアーバンなナンバーがあり、「(East) Kakalak Swang」のようなグルーヴィなナンバーがあり、「Soul Strut」のようなファンキーなナンバーがあり、それらは聴き手をとてりリラックスさせ、安心して聴けるものです。

今回のアルバムは、私が GRP 時代に自由に音楽作りをしていた頃を思い出させてくれた。何かを作らなくてはいけないと焦る必要はなく、ただ自分自身がやりたいように、素の表情のまま音楽を作れる環境にあったんだ。このアルバムで聴けるのは、いろいろな状況の中で自分達がどのように感じたかという軌跡なのさ。結果として完成したものは、最初に作るうと思ってたものとは全く別物になったよ。ほとんどの曲は私が昔から温めていたものな

んだ。最初はそれをアップデートしようと思ったけど、そうしたらその曲の正直さが失われてしまう可能性があった。だからあえてそのままにして、レトロなサウンドを目指した。変に今風にする必要はない。素の自分を出すべきだと思ったのさ。「Funkin' for Jamaica」がかつて私が住んでいたホームタウンのトリビュート・ソングであるように、「(East) Kakalak Swang」は今住んでいるノースカロライナのガーナーについての曲だよ。平凡な街だけど、実はジョン・コルトレーンやディジー・ガレスピーも住んでいたことがあるんだ。

「Three Chords and Truth」は神秘的な曲想を持つジャズ・ロック調のナンバーで、あなたのトランペットも非常にクールな雰囲気を出しています。ここでは DJ ロジックのスクラッチもフィーチャーされていますが、彼のような通常のジャズ・ミュージシャンとは違うアーティストとの共演はいかがでしたか？

そもそも「Funkin' for Jamaica」だってストリート・ラップをフィーチャーしてたから、私にとってそれは全く不自然なことではない。ジャズとヒップホップは文化的な面で繋がっているんだ。「Three Chords and Truth」はマイルス・デイヴィスの『Nefertiti』を偲んだ曲だけど、ヒップホップ・チューンの中に織り込むことができる楽曲だと思うよ。

ジャクソン5の「I'll Be There」のカバーもしていますが、これはマイケル・ジャクソンへのトリビュートですか？

あの曲はトリビュートというよりはマイケルのことをよく考えてほしいと思って作ったんだ。スーパースターのことになると、みんな業績や知名度ばかりに固執してしまう傾向があるからね。キング牧師が言ったように、人は内面を評価すべきであり、有名になることよりも、前進して新しい未来を切り開くことが大切なんだ。その人が存在していたことを証明する足跡こそ、私達は覚えていなければいけない。そういう意味で、私はマイケルのことを称賛したい。自分が死ぬ時、私が音楽で残した業績なんてものは無意味で、私が生きたということそれ自体が大事なんだと思うようになったのさ。●

Wax Poetics Japan No.11 (8/31 release)  
Tom Browne interview ENGLISH TRANSLATION

1. It's been about ten years since your last album "R 'N' Browne" came out in 1999. I heard you took a position as a captain of Continental Airlines in 2000. Why did you get away from music business for a while? What made you make that decision at that time?

Ans. First, I have been flying professionally since 1988 at which time I was a co-pilot on a small regional airline called W.R.A. In 1989, I was hired as a Captain for a charter company flying executive aircraft.

The position that I took in 2001 as a was with Continental Connection and was done because of two reasons; first, I wanted to fulfill a life long dream of being an airline pilot before I became too old, and and finally I was unable to sustain financially on revenues solely from the music business. I continued as an airline captain with a Fed Ex Feeder company named Mountain Air Cargo until January, 2008.

2. You got a private pilot license in 1973 and you have actually been working as a pilot from the late 80' s. I think it's very unique for a musician to become a pilot. How do you handle two completely different jobs at the same time? How do you balance them out?

Ans. I am a type A personality; The music has always filled a void within me for creativity, but the aviation career allows an avenue for my drive for precision. Balancing them is a difficult endeavor because both careers really require full time attentiveness in order to develop. It was for this reason that I decided to return to full time music only as a career in these later years.

3. Let's talk about your career in music. You started playing the piano at the age of 11, and you started to play the trumpet after that. How did you start playing the trumpet? Was that what you really wanted to play besides piano? because I don't think the piano and the trumpet have much in common, and I don't really know anyone who plays both.

Ans. Actually, the piano is a required foundation in all collegiate music performance majors programs and forms an excellent foundation regardless of ones primary instrument. It facilitates musical composition and harmony, arranging and a host of other skills. Although I did start on piano, my found love was trumpet. There was something about the regal sound of it; the pomp! I was a classical player long before I was introduced to jazz.

4. How did you learn music? Did you take special education in music? Who did you learn music from? Could you name some of the musicians or composers that you learned music from?

ans. In junior high school, I won a scholarship to study with Murray Karpilovsky, the principal trumpeter for the NBC orchestra while under the direction of Arturo Toscanini circa 1958 or so. I also attended The High School of Music and Art which so many wonderful players also attended. Some were Noel Pointer, Marcus Miller, Dave Valentin, Janis Ian and too many others to name.

My learning in jazz actually came while listening to great players in the clubs; players like Freddie Hubbard and Richard Williams who frequented local clubs in my home town of Jamaica, New York.

5. I heard your first gig was in the club in Queens named Village Door and you played in Weldon Irvine's band and it was some time around 1975. I also heard Irvine was the man among musicians at that time and that everybody loved him. He knew not only Jazz but also a whole lot of other music, and he was charismatic even in club music scene. He passed away in 2002 (R.I.P.) but could you talk about him a little? What do you remember about him?

Ans. Weldon had the unique ability of being able to see undeveloped talent in the youth and nurture it into cohesiveness. I suppose my fondest memory of him is his talent for unifying and focusing the many different egos and personalities that worked with him; Marcus Miller, Don Blackman, Lenny White, the Breckers, Bernard Wright and a host of others. He also was a uniquely gifted arranger.

6. Marcus Miller and Bernard Wright were among the famous musicians who were with Irvine at that time. Are you still connected to these people?

Ans. I see Bernard from time to time when on the road, but we have all pretty much gone separate ways for one reason or another. The last I saw of Lenny White was when we were label mates on Hip Bop records.

7. You worked with Sonny Fortune on his "Infinity", and started playing in Ronny Smith's band. You also have worked with famous musicians like Freddie Hubbard and Woody Shaw. Which gigs you still remember the most? Who influenced you the most? I'm pretty sure that you remember every gig in some kind of way and there are a lot of musicians you got the influence from but could you tell me some of the story?

Ans. Truthfully, except for mainly the older jazz players, the musical characteristic of “having a signature sound” is a lost art. I find this true even with folks like Wynton Marsalis, a great player. Once, a musician would start to play and a listener instantly knew who it was by the characteristic of their sound and style. Sonny Fortune is one of those remaining players, as was Woody Shaw. The gig that I remember most was one at the Village Vanguard in NYC around 1976 while with Sonny’s band. Woody Shaw was invited to play. I was flattered to hear a man approach the cornet in a manner unlike any other player that I had heard, playing a parallel to John Coltrane’s “sheets of sound” on brass and yet unique in his approach. There was...and still is ...only one Woody Shaw.

8. You signed to Dave Grusin and Larry Rosen’s GPR Records with the help of George Benson and Earl Klugh, and you released your first album “Browne Sugar” in 1979. How do you see your first album when you look back now?

Ans. I view my first album as “immature, but sincere.” Quite honestly, it seems that no sooner do I release a record than I wish one hundred things had been played differently. My trumpet tone seemed too “brash and hard” back then. All I can do is move forward.

9. Your “Funkin’ For Jamaica” became a huge hit and topped the billboard R&B charts and also number 10 on UK top charts. You became a superstar not only in Jazz/Fusion but also in Black Contemporary. The song is so influential that people still listen to it and sample it. How did the song come about? How did you get the idea of that song?

Ans. At the time that Funkin’ For Jamaica was written, the album “Love Approach” was almost finished. Grusin and Rosen felt there was still something missing; a “void” on the record. I remember working at home with this bass line and groove that I had. When I showed it to Bernard Wright (in the studio a few days later,) he said “oh, I dig!” With Grusin’s keyboard harmony, it all came together. I then asked Toni Smith (the girlfriend of a keyboard player I was working with) to compose lyrics. Arista Records, the GRP distributor, didn’t view the song as anything much initially, but changed their tune when it caught on. The song was nothing more than a Jamaica, NY “cats” jam session on a groove. It became the signature of Jamaica, NY because it was the sound of the young Jamaica NY players.

10. You released “Magic “ and “Rockin’ Radio” and both made a hit. but in the late 80’ s, you became busy with the job as a pilot and you were not so active in creating music as you were before. Like I said, you’ ve been away from music business since 2000, you came back to music business in 2008. What made you do so? Were there specific reasons why you restart doing music?

Ans. When I first signed with GRP in 1978, I was asked to simply create music. After Funkin For Jamaica, I was asked to “make hits” , a different scenario. It was no longer about a variety of creativity, but rather about following a formula that worked before. I feel that this was not so much the fault of GRP, but rather the money fueling the projects; Arista. In fact, Arista purchased my contract from GRP in 1983 (I think) for the very reason of pursuing more hits. Eventually (around 1985) after several failed records using other producers, both Arista and I became disgusted with the relationship. I left the label in ’86. I really did not heavily seek a deal after that; the last few years had left such a horrid after taste. I made one final album as a christian musician for Malaco Records, and then pretty much abandoned my music career for what was supposed to be my first passion, flying. In the mid ’90s, a former acquaintance started a record label and showed a genuine interest in me. I made several records for Hip Bop, spanning into the early 2000s. All during this time, I held on to aviation as my stable source of income. In 2008, circumstances and a questionable economic future mandated consideration of a career change. I decided that I would give one hundred percent to make this music career work.

11. You did a tour with Roy Ayers and Wayne Henderson and Lonnie Liston Smith in 2008. You actually came here in Japan. How did the tour go? What was it like to work with those big artists?

Ans. I work with Roy, Wayne and Lonnie all of the time and consider them to be com padres rather than “big artists.” The tour went well.

12. You came to Japan in 2009 to perform in Mt. Fuji Music Festival that Teruo Nakamura produced. You performed as a guest in Groove collectives. How did you and Mr. Nakamura and Groove Collectives meet? How did you build a relationship with them that you guys have now?

Ans. Teruo introduced me to Groove Collective at the inception of this record. My relationship with Teruo however, goes back to long before I signed my first record deal. I first met Teruo in the mid 1970s in our mutual hometown of Jamaica, NY. Both Teruo and I frequented several jazz clubs that were in existence around the area at that time. Teruo was one of the many established professional band leaders that called Jamaica "home" in that period.

13. Your new album is produced by Mr. Nakamura and co-produced by Jay Rodriguez. You worked with Jay on his new "Brooklyn Connection" album. What kind of musician do you think he is?

Ans. Jay is, in my opinion, a phenomenal player; one who is not restricted to the standard "cliches" of so many of today's popular saxophone artists.

14. Fred Wesley, who is one of the biggest names in Funk music, did his thing on your new album. When did you meet him? Have you guys known each other for a while?

Ans. The CD recording date was my first (but hopefully not last) meeting with Mr. Fred Wesley. He happened to be in town recording, and graciously accepted the invitation to perform on the CD.

15. I think this album shows what you have been doing. By that I mean it's a nice mix of Jazz, Fusion, Soul and Funk, and you did it just right. How did the idea of this album come about? What kind of music did you try to create?

Ans. That's the nice thing about this CD, and I haven't felt such contentment since my early GRP days. We weren't trying to create anything. We were just being ourselves in a variety of music composition environments. What you are hearing is simply how we each "vibed" in a particular situation. The outcome was not a pre-planned one.

16. This album contains something mellow like "Lament", something urban like "Freeway", something groovy like "(East)Kakalak Swang" and something funky like "Soul Strut". They are very relaxing and comfortable to hear. But I think musicians have to try not to sound like they were music from 80's and 90's and try to do new stuff and challenge yourself. Did you try something new in order to make it sound like it's produced in 2010 on the album?

Ans. Many of the songs that I presented were actually written decades ago. I considered trying to “update” the sound, but the truth is that the sincerity of the song would have been lost. It just felt best to present it as is and see what happened whether it had a “retro” sound or not. We weren’t going for “2010.”

17. On “(East)Kakalak Swang” , you used synthesizer play and drum programming besides the trumpet and Flugelhorn. Is this kind of production what you have been doing for a while?

Ans. Just as Jamaica Funk was a tribute to my former home-town, “Kakalak” recognizes the characteristic of my current residence of Garner, North Carolina, a “seemingly Andy Griffith” type of place that actually has rooted some of the worlds best jazz musicians like John Coltrane and Dizzy Gillespie. To answer your question, yes, sequenced drums and synthesizer parts were the norm on most of my previous records although that was not my foundation. There is a (limited) place for such, but not the entire project.

18. You did a cover of “I’ ll Be There” . Is this meant to be a tribute to Michael Jackson?

Ans. It was meant to be “reflective.”

Most times (with a super-star,) the public gets caught up in the greatness of ones accomplishments and notoriety. Dr. King said it best, however; we should be judged by the content of our character; the progression toward a greater good and not just how famous we are. We should be remembered for the Godly mark we leave on this earth. In that respect, I would like to hope favorable thoughts regarding Michael Jackson. I do know that when my time of death comes and I stand before God, what I have done “musically” is going to matter very little!

19. “Three Chords And Truth” is very spiritual Jazz-Rock song and your trumpet is sounding very nice. You put DJ Logic’ s scratch on this one. What was it like to work with musician who jazz musicians don’ t usually work with?

Ans. There is a connection between jazz and hip-hop; each swings in a a culturally rooted sort of way. With that, it is possible to take a track like “Three Chords” (which is reminiscent of Miles Davis’ “Nefertiti” ) and weave in a hip hop element. It works.

20. What’ s your plan in the near future? Is there any tours that you trying to putting together?

Ans. I have many concerts scheduled for the remainder of this year. I would hope that the release of this CD would generate opportunity to share this music with the Japanese audience sometime in the not too distant future.

21. Any messages for your fans in Japan? any specific points that you want us to listen to on this album?

Ans. A very sincere "thank you" for your continued support for jazz music. You, more so than the U. S. audience, have kept so very many fine players hopeful for the future of this music.

Thank you for your time!